



④受容の原則とは？



A バイステックの7原則④、ですね。

人と関わる援助者の行動規範として有名なものに「バイステックの7原則」があり、今回はその4つめ「受容の原則」です。

子どもの考えを「決して頭から否定せず、どうしてそのような考え方になるのかを理解する」という考え方です。

その人の在りようをありのままに受け止めていこう、というスタンスですね。

その人の考えは、その人の人生経験や思考からくるものなので、その人自身の「個性」である、とされているのです。

子どもはひとり一人性格も違えば、同じ事実に対しての意見もそれぞれ違い、さらには人生観も違っています。

スタッフの立場から見ると、困ったことをしていたりやってほしくないことを好んですることもあるのではないかしら。

だからと言って頭ごなしに非難するのではなく、まず「受け止める」ことが先決なのです。

子どもはありのままの自分をそのまま受け止めてもらえることに安心感を抱きます。

拒絶されたらどうしよう、や、否定されたらイヤだ、という不安や恐れから解放されるのね。

安心できる場所、安心できる人ということなのです。

でも、自分や人を傷つけたりといった行為や、非人道的な行為は見逃すわけにはいかないものです。

何もかもすべてを許容し容認する、ということではありません。

受け止めるべき対象は「好ましいもの」というその人独自の価値観ではなく「真なるもの」という、ありのままの現実、なのです。

子どもが持っている承認の欲求、「認めてほしい」という気持ちを尊重するということ。

そのために子どもの持つ個性をどこまでも尊重しながら、あるがままの姿を「現実」としてとらえていくのです。

もし子供がなにかを拒否したとしても、その事実をも含め気持ちや考えを尊重していこう、認めていこうという考え方なのです。

ひょっとしたら、その子どもは何か頼らなければダメと思っているのかもしれない。
弱かったり欠点を持っているかもしれないし、失敗したことを大きく引きずっているかもしれない。
それでも一人の価値ある人間として、生まれながらに尊厳を持っている人間として、受け止めてほしい、と思っているのではないかしら。

子どもへ「ああしなさい」「こうしなさい」といった命令や、感情の否定は決してしない。
「ありのままの自分を見てほしい、受け入れてほしい」という要求に応えていく。
「受容」でも、先入観や偏見といったバイアスをかけずに「なぜそうなったのだろう」と考えていくことが大切なのです。

《MENU》

《③統制された情緒関与の原則とは？

⑤非審判的な態度の原則とは？》

2023-06-26 掲載